

紀元後のエリュマイス王国

春田 晴郎

はじめに

現在のイランの南西部、フーゼスタン地方は、地形的には、西のメンポタミアにつながる平野部と、ザグロス山間部とから成り立っている。フーゼスタンは、かつてエラム人が活躍した地方であり、北部平野部にあるエラム時代からの都市スーサ Suse は、ハカーマニシュ朝（アカイメネス朝ベルシア）時代には首府として機能していた。

このフーゼスタンに、紀元前二世紀半ばから紀元後三世初めにかけて、小さな王国が存在していた。本稿で扱うエリュマイス Elymais 王国である。

エリュマイス王国の歴史は、その支配領域および発行貨幣の違いによって、後四五年頃を境に大きく二つの時期に区分される。

ここでは、オジエの用語にならって、前半をⅠ期、後半をⅡ期と呼ぶ。

呼ぶ。

Ⅰ期の領域は、フーゼスタン北東部の山岳地帯と南部の低地と推定され、ごく短い期間を除いて北部平野部の中心都市スーサは含まれていない。貨幣は銀貨と銅貨が発行されており、貨幣の銘文の言語はギリシア語のみである。

これに対してⅡ期の領域は、スーサやその近傍（スシアナ Sf. Sarda 平野）を含むものとなる。① フーゼスタンの大部分が支配領域になったと考えられる。貨幣は銅貨のみとなり、また銘文にギリシア語以外の言語も用いられるようになる。

Ⅱ期はさらに発行銅貨の相違から二つの時期に明確に区別できる。本稿では、その前半をⅡA期、後半をⅡB期と呼ぶ。ⅡA期の銅貨は、Ⅰ期のテトラドラクマ銀貨の直径（三十ミリ弱）と重量（十五グラム弱）を受け継いだ大規格貨（grand module）と、

Ⅰ期のドラクマ銀貨の直径（十五ミリ前後）と重量（三〜四グラ

ム)を受け継いだ小規格貨 (petit module) とからなる。これに
対して II B 期の銅貨では、大規格貨がなくなり、小規格貨と直径
九く十二ミリ、重量二・五グラム以下の極小規格 (très petit mo-
dèle) 貨とが存在するようになる。また II A 期銅貨では表面の王
の胸像の右側に「三日月と星」および「上下逆向きの錨」のシン
ボルが必ず描かれているが、II B 期では必ずしもシンボルは描か
れなくなり、特に「三日月」のシンボルはきわめて稀になる。^④

さて、本稿で確認するのは以下の点についてである。

エリュマイス王国 II A 期 (おおよそ紀元後一世紀後半から二世
紀半ばにかけてと考えられる)^⑤ の貨幣の銘文の言語は、スーサで
鑄造された、小規格貨の銘文をもつ貨幣 (有銘貨幣) と、スーサ
以外の地で鑄造された大規格貨とは異なる。小規格貨の銘文は、
はじめはギリシア語で記され、そののち、不明の言語 (バルティ
ア語とも考えられる) で記されるようになる。一方、大規格貨の
銘文は、アラム語で一貫して記される。

右記の結論に到達するためには、II A 期の貨幣の相対年代——
いかえれば II A 期の王位の継承順、大小両規格貨の鑄造地、銘
文に記された言語、以上の三点について知ることが必要である。
実は、オジュの報告が出版された段階 (一九七九年)^⑥ でこの三点
はそれぞれ明らかになっているのである。ただ、研究史が的確に

把握されていないためか、これら三点についての研究を総合する
試みはなされていない。そこで本稿では、II A 期の史料を紹介し
た後、王位の継承順、貨幣の鑄造地、銘文の言語について、従来
の説を確認、補強し、それらを総合して右記の結論を導き出す。

④ C. Augé, Monnaies d'Élymatis de Bard-è-Néhandeh et Mas-
sif-i-Solaiman, C. Augé — R. Curjel — G. Le Rider, *Terrasses
sarcées de Bard-è-Néhandeh et Massif-i-Solaiman: Les trouvail-
les monétaires*, Mémoires de la Délégation Archéologique en Iran
44, Paris 1979, pp. 35-162 pl. 3-17 (=Augé, Monnaies d'Élyma-
tis), など、イラン (イラン) を発掘したフランス隊の報告書は以
下の略号を用いる。

MDP: Mémoires de la Délégation en Perse

MMAP: Mémoires de la Mission Archéologique de Perse

MDAI: Mémoires de la Mission Archéologique en Iran

MDAI: Mémoires de la Délégation Archéologique en Iran

⑤ 1 期 $\text{D}^{\text{I}} \text{A}^{\text{I}}$ G. Le Rider, *Suse sous les Séleucides et les
Parthes. Les trouvailles monétaires et l'histoire de la ville*, MMAP
38, Paris 1965 (=Le Rider, *Suse*), pp. 352-358, 426-427 2-45
R. N. Frye, *The History of Ancient Iran*, München 1984, pp. 273-
275 参照。

⑥ 後四五年頃、スーサにおけるアルシャタ朝 (アルサケネス朝、バルティ
ア) 貨幣の発行は終わる。そしてそれ以降スーサはエリュマイス王国
の支配下に入った、と考えられる (Le Rider, *Suse*, pp. 425-

426) Ⅱ期にわたる概説は Le Rider, *Suse*, pp. 426-430 を参照。Frye, *loc. cit.* が信頼される。

- ④ ⅡA期の貨幣とⅡB期の貨幣との差異については Augé, *Monnaies d'Élymatie* 参照。ⅡB期にうつづいて、現在の史料公刊状況からわかることは、くわちかである。Augé, *op. cit.* では、ⅡB期の貨幣が七種類に分けられ、各々異なった王に帰属をせられてゐる。しかし、そのうちのいくつかの種類は一人の王に属するものかもしれない。現に M. Alram, *Nomina propria iranica in nominis, Transisches Personennamenbuch* 4, Wien 1986 (pp. 137-153, Tf. 14-16) がエリュマイス貨幣を扱つて、Alram, *Nomina propria* (略) では王は五人とされている。また王の前後順もオシエントララトとは必ずしも一致してゐない。

- ⑤ ⅡA期の貨幣全々の年代を後一八〇五〇年頃におき、最初の王はアルシヤク朝諸王の王アルタバーン二世(古く数え方では三世、在位は後一〇〇三八年)の王子であるとする U. Kahstedt, *Ariabanos III und seine Epochen*, Bern 1950, pp. 39-47 の説は、Le Rider, *Suse* 刊行(一九六五年)以降、全く価値を失つた。後四五年頃までアルシヤク朝が確保していたスーサ(このことをル・リデルは確証した)において大量のエリュマイスⅡA期貨幣が発見されている事実、カールシュテット説は完全に矛盾するからである。にもかかわらずカールシュテット説を肯定的に紹介する研究があとをたないの、目に付いた限りをここに列挙しておく。E. J. Keall, *Parthian Nippur and Vologases' Southern Strategy: A Hypothesis*, *Journal of the American Oriental Society* (=JAOS) 95, 1975, pp. 630-633 中の pp. 622-624, K. Schippmann, *Grundzüge der parthischen Geschicht-*

che, Darmstadt 1980, pp. 50-51, *id.*, *Arsacids* ii. The Arsacid Dynasty, *Encyclopaedia Iranica*, E. Yarshater ed., London etc. (=EIr), Vol. II fasc. 5, 1986, pp. 525-536 中の p. 529 *id.*, Artabannus, *EIr*, Vol. II fasc. 6, 1986, pp. 647-650 中の p. 648, L. Vanden Berghe — K. Schippmann, *Les reliiefs rupestres d'Élymatie (Iran) de l'époque parthe*, *Iranica Antiqua supplément* III, Gent 1985 (=Vanden Berghe — Schippmann, *Les reliiefs*), pp. 27-28. 今後この傾向が継続して注意が必要である。

⑥ Augé, *Monnaies d'Élymatie*.

一 貨幣史料と碑文史料

エリュマイス王国の研究は貨幣が中心となるので、まず発掘によって出土した貨幣の公刊・報告状況をみておく。

発掘途上で個々に発見された貨幣から述べる。

- フランス隊のスーサ発掘分では、一九二五〇六、一九二六〇七、一九二七〇八、一九二九〇三^①、一九三二〇二年のシーズンについてはアロット・ド・ラ・フェイによって、一九四六〇五六年分はル・リデルによって報告されている。しかし、これらの報告の分類は粗く、個々の貨幣のデータはほとんど得られない。ただし、王朝別に比較した場合のエリュマイス貨幣の量の多さだけは十分認識することができる。たとえば一九二五〇六年では、全八八二枚中、セレウコス朝貨幣三五枚、アルシヤク朝貨幣一五九枚、セ

レウコス朝貨幣かあるいはアルシヤク朝貨幣八〇枚、エリュマイ
ス貨幣二二三枚、サーサーン朝貨幣四〇枚、イスラム貨幣六二枚、
その他不明二八三枚と分類されている（エリュマイス貨幣の内訳
は、Ⅰ期〇枚、ⅡA期一五九枚、ⅡB期二九枚、不明三五枚）^⑧。
その他とくに一九二五年以前の発掘分については、ほとんどがバ
リに所蔵されているのであろうが報告はない。

ザグロス山麓の近接する二つの遺跡バルデ・ネシャーンデ
Bard-e Nesānde とマスジエ・ソレイマーン Masjed-e Solei-
mān は、ギルシュマン率いるフランス隊によって一九六四―七
二年に発掘された。出土貨幣はほぼ半数ずつテヘランとバリに分
けられたが、そのうちのバリ所蔵分の報告書が、一九七九年オジ
ハラによって出版された^⑩。

このうちマスジエ・ソレイマーン出土エリュマイス貨幣は二
三七枚^⑪（Ⅰ期三枚、ⅡA期一八五枚、ⅡB期四五枚、不明四枚）
で、分類が詳細になされており定量的な扱いも可能である。

バルデ・ネシャーンデ出土エリュマイス貨幣はほとんどが次に
述べる一括出土の貨幣であるが、他の部分から発見された二九枚
（Ⅰ期二枚、ⅡA期一八枚、ⅡB期九枚）も報告書に収録されて
いる。

その他いくつかの地域からの採集記録も報告されている^⑫。

一方、一括出土の貨幣については、以下の二つが重要である。
一九〇〇年スーサのアクロポリスで発見された五八三枚の埋納
貨幣（うち、五八一枚がエリュマイスⅡA期貨幣、一枚がオスロ
エス貨幣と呼ばれる特殊な貨幣^⑬、不明一枚）は、一九〇五年ア
ロット・ド・ラ・フェイによって詳細に分類・研究され、発表さ
れた^⑭。彼の研究は現在でもそのまま利用することができる。

一九六六年、バルデ・ネシャーンデの下部のテラス上に建てら
れた四柱の神殿 (temple tétrastylo) の第五室から第一室へ上が
る石段の上段の敷石の下から、四九〇五枚の貨幣が発見された^⑮。
ギルシュマンの報告によればエリュマイス貨幣は計四七三五枚で、
そのうちバリ所蔵分二四四八枚（Ⅰ期〇枚、ⅡA期二四三七枚、
オスロエス貨幣一枚、ⅡB期五枚、不明五枚）がオジエの報告に
収録されている^⑯。これらの貨幣の埋納の時期は、中に後一九〇
一年付のアルシヤク朝銅貨が含まれており明らかにそれ以降、一
方サーサーン朝の貨幣は含まれていないのでサーサーン朝のフー
ゼスタン征服（後二二四年頃）以前、と比較的短い期間に特定で
きる^⑰。量、種類ともに、今後のエリュマイス貨幣研究の基礎に据
えられるべき史料である。

その他、ヒルの大英博物館所蔵分のカタログには、デズフル
Dezful やスーサ出土の埋納貨幣が収録されているが、出土貨幣

全体の状況を知ることができない。フールスのシーラーズ *Seheras* で一括出土したと伝えられるエリュマイス貨幣については私は確認することができず詳細は不明である。^②

以上がエリュマイス貨幣の公刊・報告状況である。史料として扱えるのは、バルデ・ネンヤーンデの一括出土貨幣、スーサー一九〇〇年発見の一括出土貨幣、そしてマスジュデ・ソレイマーン出土貨幣であろう。スーサーから個々出土した貨幣は、報告されていない分が多く全容が全くつかめないため注意を要するが、各報告を総計すれば利用価値は少し増す。

それでは、ここでⅡA期貨幣について、次章以下の検討に必要な最少限の範囲で、素描してみよう（後述表一も参照）^③。

全てのⅡA期貨幣に共通する特徴として、表面に王の胸像が描かれ、胸像の右に「三日月と星」および「上下逆向きの錨」のシンボルが存在することがあげられる。王は、次章で述べるように、五人が数えられる（ただし次章注⑩参照）。

一人の王に属する貨幣が、いくつかのタイプに分類される場合もある。タイプの分類は、表面の王の胸像の相違に基くものである。同一タイプ（一王一タイプの場合も含む）に属する大規格貨の表面と小規格貨の表面とでは、銘文の有無を除いて、画像表現上めだつた差異はない。もちろん、大きさの違いがあるため、よ

り大きな大規格貨の方が、より微細な表現がなされている。なお、タイプによっては、大規格貨の存在しないタイプもある。

大規格貨のうち、カブネシキユール（？）の貨幣には銘文が存在しない。しかし、残りの四王の大規格貨では、表面に銘文が必ず記されている。

大規格貨の裏面は、数多くの細長い筋・点がみられるのみである。ただし、ウロード *Urod* (*wiro*)^④ 一世の場合は、その中に「錨」のシンボルが入っている貨幣もある。

小規格貨では、表面が同一タイプであっても、裏面がさらにいくつかの形式に分類できる場合が多い（後述表三参照）。一部の貨幣の裏面には、女神の胸像あるいは全身像のまわりに銘文が記されている。大規格貨と違い、小規格貨には、無銘の貨幣も数多い。

なお、ⅡA期貨幣には、年号や、鑄造地をあらわすモノグラムは記されていない。

ⅡA期貨幣の基本的な特徴は、右のようにまとめられる。

さて、はじめに、述べたように、本稿は銘文の言語の推移を確認するのが目的なので、貨幣史料以外の当時の文字史料すなわち碑文にも目を通しておく必要がある。

出土・所在地をスーサーとザグロス山間部に分けて概観する。

スーサではアルシャク朝時代のギリシア語碑文がいくつか出土している^②。中でも有名なのは、後二一／二年付の王布告（刻文は後二五／六年）であろう^③。その後のエリュマイス王国下のスーサから碑文は発見されていない。後二一五年付の、アルシャク朝諸王の王アルタバーン四世とスーサ（スシアナ）のサトラップが描かれた浮彫に付された碑文は、パルティア語で記されている（ただし当時のエリュマイス王国とアルシャク朝の關係はよくわからない）^④。

一方、ザグロス山間部では、一ヶ所ホンゲ・ノウルースマイー Konge-Nouruzi の浮彫にパルティア語碑文が記されている可能性があるのを除いて、他の確認できる碑文、タンゲ・サルヴァー Tang-e Sarvak^⑤、タンマ・ボタン Tang-e Botan^⑥、ホンダ・キヤールヴァンド Konge-Kamalyvand^⑦、ナルデ・ネシャーンデ^⑧、マスジエデ・ソレイマーン^⑨の諸碑文はすべてアラム語で書かれている。これらの碑文で用いられるアラム文字の字体は全くエリュマイス独自のものである^⑩（以降エリュマイス字体と呼ぶ）。エリュマイス字体の全容は、ヒニングによって明らかにされた^⑪。パレオグラフィの点から若干の字体の変遷を追うことは可能であるが、絶対年代の決め手はなく、エリュマイス王国Ⅰ期、Ⅱ期どちらにどの碑文が属するか研究者の一致はみられていない^⑫。

以上がエリュマイス王国関連地域の碑文の言語の状況である。このような貨幣史料、碑文史料の状況をふまえたうえで、ⅡA期貨幣の研究からえられたⅡA期の王位継承順についてまず述べてよう。

① ことにⅡA期は、現地外の同時代史料が極度に乏しい。私の知る限りでは、シリバのアルミラ出土の後二一三八年の日付をもつ二ヶ国語碑文のみである（アルミラ語版は J. Canineau, *La Susiane dans une inscription palmyrénienne, Mélanges syriens offerts à M. René Dussaud*, I, Bibliothèque archéologique et historique 30-1, Paris 1939, pp. 277-279; キリント語版は H. Seyrig, *Antiquités syriennes* 38: Inscriptions grecques de l'agora de Palmyre, *Syria* 22, 1941, pp. 223-270 中 G. pp. 255-258 以下取録）。この欠損のゆえに商人への頭彫碑文は、キリント語版は *Albuthayn* (ハリアイク) のアルミラ語版は *Susa* (クーサ) の *wawd mlk* (カローエ王) のアルミラ語版は *mlk* である。Le Rider, *Suse*, pp. 432-433 以下参照。

② Allotte de la Fuÿe, *Inventaire des monnaies trouvées à Suse pendant la campagne de fouilles 1925-1926*, *M/M/AP* 20, 1928, pp. 3-46 (=Allotte de la Fuÿe, *Suse 1925-1926*)。③ id., *Inventaire sommaire des monnaies recueillies à Suse pendant la campagne 1926-1927*, *M/M/AP* 20, 1928, pp. 47-58 (=Allotte de la Fuÿe, *Suse 1926-1927*)。④ id., *Inventaire des monnaies trouvées à Suse. Première partie*, *M/M/AP* 25, 1934, pp. 1-27 中 G. pp. 1-19, I *Campagne 1927-1928*

303-315 中でも斷續をされておる注意を要する。なお、オスロホス貨幣は、ノロマン・エ・ラ・ノマンの報告(次刊)には Phnataake (?) の貨幣として分類せられてゐる。

⑳ Allotte de la Fuyé, Monnaies de l'Élymaïde, *MDP* 8, 1905, pp. 177-243, pl. X-XIV (=Allotte de la Fuyé, Monnaies de l'Élymaïde).

㉑ Chirshman, *Terrasses sacrées*, p. 40, plan II, Pl. XXXII. ただし貨幣の報告は (Augé, Monnaies d'Élymaïde, p. 38 など) より、総論を著述した全へ触れられてゐる(埋蔵の「補足」部分)(lots supplémentaires) などの記載を参照せよ。これは、その年代の報告と関係をもつてゐる。

㉒ Augé, op. cit., p. 38, Chirshman, op. cit., p. 40.

㉓ Chirshman, loc. cit. 同じく彼は出土した銅貨の数を四枚と述べてゐる。C. Augé — G. Le Rider, Monnaies diverses de Bard-é-Néhandeh et de Masjid-i Sohaiman, *MDAI* 44, pp. 5-33, pl. 1-2 (=Augé — Le Rider, Monnaies diverses) より、これは、ブルシヤ朝銅貨は、所蔵分だけ八枚が数えられ、ギンシマンの報告中の数字に全幅の信頼を置くべきではなからう。

㉔ Augé, Monnaies d'Élymaïde.

㉕ Augé — Le Rider, Monnaies diverses, pl. 2, No. 36, *gbl* (ニヤマノス暦五〇二年すなわち後一九〇一年) とする年号は明瞭。Chirshman, loc. cit. では埋納の時期を単に後三世紀としてゐるが、これは一枚を採られたカニシカ貨幣のみを根拠としたもので、訂正をしなければならぬ。この点については既に Augé, Monnaies d'Élymaïde, p. 38 で強調されてゐる。

㉖ 埋納の時期と四柱の神殿の建立あるは修復の時期との関連は不明である。ギンシマンの埋納を dépôt de fondation と記入してゐる Chirshman, loc. cit. 44-45, id., Introduction, *MDAI* 44, pp. IX-XII には、総論と埋納の年代を述べられてゐる。

㉗ Hamatte, Parthia and Elymais in the 2nd Century B. C., *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 29, 1981, pp. 189-217, fig. 1-2 (=Hamatta, Parthia and Elymais) 中 p. 207 n. 40 には、埋納の年代の推定と埋納の年代を述べられてゐる。

㉘ G. F. Hill, *Catalogue of the Greek Coins of Arabia, Mesopotamia and Persia*, *British Museum*, London 1922 (=Hill, *Catalogue*) 中 pp. cxxxii-cxvii, 245-288, pl. XXXVIII-XLII, LIII には、埋納の年代を述べられてゐる。

㉙ A. G. Nordmann, Ueber eine bisher unbekannte Varietät arsakidischen Münzen, *Zeitschrift für Numismatik* 3, 1876 3米時。ただし、Allotte de la Fuyé, Monnaies de l'Élymaïde, p. 178 44より Le Rider, *Suse*, p. 352 n. 10 には、埋納の年代を本朝のローマから出土したものを疑問を呈してゐる。

㉚ その他 J. de Morgan, *Manuel de numismatique de l'Antiquité et du Moyen Age*, 1, Paris 1923-1926, p. 195 には、ローマ中世の埋納の存在を認められてゐるが、詳細は不明である。

㉛ 本稿は II A 期貨幣の分類に關して新たな説を提示するものではないが、貨幣の図示は省略した。詳細は Augé, Monnaies d'Élymaïde 44-45, Hill, *Catalogue* など、Allotte de la Fuyé, Monnaies de l'Élymaïde 参照。論文の年代を埋納の年代と見做す Alram, *Nomina*

propheta でも概観することができる (ただし四章注②参照)。

⑳ 本稿では、王名はアラム語表記を一応の基準として行っているが、オシエラの用いるギリシア名とは少し異なる表記になっている。ただし、どのように発音していたか不明な点も多く、カナ表記はあくまで仮のものと考えてほしい。ウロード、フラアート Praet (pr²) の語源はイラン語で、カブネシユキールウロー、Kabnestir-Urod (Kabnsky-twrod) のカブネシユキールの語源は遠くアラム語で、溯る。なお、ヘラト語 kapnuskira の語源については、川瀬孝平「トルセキリス『戒書文書』における kapnuskir 再考」『西洋史学』一三七、一九八五年、三九〇五頁、参照。

㉑ Supplementum epigraphicum graecum (=SEG) VII, 1934, n. 1-34 255a のみについて。

㉒ SEG VII, n. 1 粟野頼之祐氏の詳細な研究がある (粟野「安徳王アルタノヌ三世王令のギリシア碑文について」粟野頼之祐『出土史料によるギリシア史の研究』岩波書店 一九五〇年 一六七〜二一六頁)。

㉓ W. B. Henning, The monuments and inscriptions of Tang-i Sarvak, *Asia Major* N. S., 2, 1952, pp. 151-178, pl. i-xx (=Henning, Tang-i Sarvak) 中の p. 176 に解説された。なおこの碑文のある浮彫の左右外縁部に同様の文字にみえる碑文があるが解説をされていない。

㉔ 一般に、アルシヤク朝がエリュマイヌ王国からメーサを奪還した際の経路をめぐって考案されている (Le Rider, *Suse*, p. 430)。このメーサにアルシヤク朝のサトマツプが置かれていたこと、メーサにおける土着の王の存在が全く両立しないものかについては明らかでない。

少ない。少なくとも後三世紀にアルシヤク朝貨幣が再びメーサで発行されることはなかった。なお両国の関係はⅡ期を通じて不明である。

㉕ Harmatta, Parthia and Elymais の主張。ハルマッタは写真から碑文を解説したという。しかし私には読み取れなかった。碑文の読み方について御教示を乞いたい。かりにハルマッタの読みが正しいとしても、このアルティア語碑文はアルシヤク朝のミフルダート一世がエリュマイヌを一時的に占領した際 (前一三九頃) に書かれたもの、ということになり、Ⅱ期の言語状況とそれほど密接な関係はないと考えられる。

㉖ Henning, Tang-i Sarvak. なお、この碑文の解釈のためには、次注論文中の Shaked による補論を必ず参照しなければならない。この補論はダビッド・タンザ・サルウマートク碑文をⅡB期の王位継承者の碑文と解釈するクニンズの見解 (ダビッド・タンザ・サルウマートク碑文の根拠を失う。Vanden Berghe — Schippmann, *Les reliqs*, pp. 76-77, pl. 37-38 の Inscription n° 5 はクニンズが見張ったものではない、未解説。ただし字体は同一である)。

㉗ A. D. H. Bivar, — S. Shaked, The inscriptions at Shimbār, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 27, 1964, pp. 265-290, pl. I-XIII (=Bivar — Shaked, Shimbār). ニューヨーク山谷ダマナ・キヤーンが著す。

㉘ W. Hinz, Zwei neuentdeckte parthische Felsreliefs, *Iranica Antiqua* 3, 1963, pp. 169-173, pl. LVIII-LIX.

㉙ J. Harmatta, Inscriptions élyméennes, Ghirshman, *Terrasses sacrees*, pp. 287-303 中の pp. 288-297 が第一の碑文について扱った (写真見 Ghirshman, *op. cit.*, Pl. XXXV)。ただし、碑文の年号の

読み方などその解釈は確定的なものとは見えな。第二の碑文に「*ウロド*」Harmatta, op. cit., pp. 297-300 444の Harmatta J., Egy újabb elymaisi felirat Bard-e-Nesandeh-ról, *Antik Tanulmányok. Studia Asiatica* 28, 1981, pp. 167-172, fig. 1-3 参照。

② Harmatta, *Inscriptions elyméennes*, pp. 300-303, Ghirshman, op. cit., Pl. LXXXI.

③ ヲの親 J. Harmatta, King Kabneskir son of King Kabneskir, *Acta Asiatica Academiae Scientiarum Hungaricae* (= *AAStH*) 30, 1982-1984, pp. 167-180, fig. 1-10 244444 Kong-e Yar Ahvand にも同種の文字たなるアラム語の碑文が認められるという。写真を見る限り、碑文の存在とその特徴的な字体たつては疑いがなそうであるが、ハルマッタの読みた関してはまた議論の余地があると思われ。

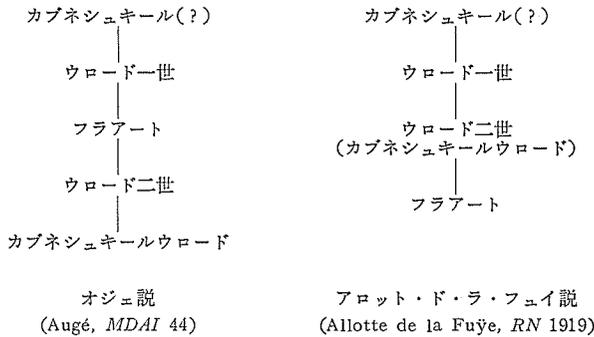
④ 字体の比較は Henning, *Tang-i Sarvak*, p. 168 444 Bivar — Shakel, *Shimbar*, p. 270 の各表参照。

⑤ Harmatta, *Inscriptions elyméennes*. (アレン)や H (メート)の字体の相違をもとに碑文を古く順た並べるた、ハルデ・ネシャーンデ第一碑文——ホンゲ・キャマールヴァンド——タンゲ・ポターイン——タンゲ・サルヴァーク、となる。

⑥ Vanden Berghie — Schipmann, *Les reliefs* 244444 エリユマイスの各浮彫の年代に關する研究者の諸説が列挙をたててゐる。

二 王位の継承順

図一は、オジュによつて提唱されたⅡA期の王位の継承順を①



図一 エリユマイス王国ⅡA期の王位の継承順

表一 II A期貨幣：各王・各タイプごとの特徴

王名	タイプ	大規格 小規格	王の肖像 向き ティアアラ		銘文の文字		その他の 弁別特徴	
			大規格	小規格	大規格貨	小規格貨*		
カブネシュキール(?)		+	+	左	-	-	-	ディアテム下の髪は帽子の縁状
ウロード一世		+	+	左	+	アラム文字 エリュマイス字体	ギリシア文字	ティアアラ内に「錨」のシンボル
フラアート	1	+	+	左	+	アラム文字 エリュマイス字体	ギリシア文字	ティアアラ内に「三日月と星」
	2	-	+	正面	+	-	ギリシア文字	
フラアート/ ウロードII**	G1	-	+	正面	+	-	-	ティアアラ内に「星」
	G2	-	+	正面	+	-	-	ティアアラに飾りなし
ウロード二世	1	-	+	正面	+	-	アラム文字 伝統的字体	ティアアラに飾りなし
	2	+	+	正面	+	アラム文字 エリュマイス字体	アラム文字 伝統的字体	ティアアラに羽冠の飾り
	3	-	+	正面	-	-	アラム文字 伝統的字体	側髪を束ね、頭頂に髻あり
カブネシュキールウロード	1	+	+	正面	-	アラム文字 エリュマイス字体	アラム文字 伝統的字体	
	2	+	+	正面	-	アラム文字 エリュマイス字体	アラム文字 伝統的字体	側髪を束ねるが頭頂に髻なし

* 銘文の存在するタイプにおいても、その中の全ての形式が有銘貨幣であるわけではない。
 ** どちらの王に帰属するか不明の貨幣。2つのグループ(G)に分れる。

それまでの通説であったアロット・ド・ラ・フェイの王位継承順と比較して示したものである。また表一は、オジェの王位継承順に従って、II A期の各王・各タイプの貨幣の特徴をまとめてみたものである。

本章では、オジェ説を確認する。

アロット・ド・ラ・フェイ説に対するオジェ説の改良点は、ウロード二世とカブネシュキールを別の王としたこと、他、フラアートをウロード一世の直後においたことである。

フラアート王に関して通説を変更した理由をオジェは何も述べていないが、次の点が強引裏付けとなる（以下いずれも表一参照）。

(1) フラアートの肖像は、タイプ1の肖像（左向）がウロード一世の肖像に似ている（小規格貨の表面では、ティアアラ内のシンボル以外に目立った相違はない）。そしてフラアート王のタイプ2の肖像（正面向）

は、フラアート／ウロードⅡ（フラアートかウロード二世かどちらの王に帰属するか不明の貨幣）の肖像やウロード二世タイプ1、タイプ2の肖像に似ている（やはり小規格貨の表面では、ティアラを除いて大きな相違はない）。したがって、フラアートの貨幣は、定期的にウロード一世の貨幣とウロード二世の貨幣との間に來るべきである。

(2) オジエの配列は、小規格貨の銘文の文字の変化を、ギリシア文字→アラム文字、と単純化できる。アロット・ド・ラ・フェイの配列では、ギリシア→アラム→ギリシア、の変化となる。この時期のイラン・イラク地域で、ギリシア文字が復活する理由を探すことはきわめて難しい。

(3) オジエの配列は、王の肖像の向きの変化についても、左向から正面向、と単純化できる（アロット・ド・ラ・フェイ説では、左向→正面向→左向）。

肖像の変化からも文字の変化からも、オジエの配列は自然であり、アロット・ド・ラ・フェイの配列よりも明らかに優れている。^③もはや通説といってよいと思われる。アルラムもオジエの王位継承順を踏襲している。^④

王統については、銘文（後述図二参照）から、フラアートがウロード一世の子、カブネシュキールウロードがウロード二世の子

ではないかと推定できる。ウロード二世の父ウロードは銘文から判断すれば王ではなかったようである。これ以上の関係を知ることとは不可能である。

なお、一九八四年にヴァルダニアンは、オジエの改良点をいちおう認めた上で、ウロード一世からカブネシュキールウロードまでの順番をそっくりひっくり返す、すなわち、カブネシュキール(?)^⑤——カブネシュキールウロード——ウロード二世——フラアート——ウロード一世、という王位の継承順を提唱した。^⑥もしヴァルダニアンの説が正しければ、私が本稿で述べる結論は完全に覆ってしまうことになる。しかし、ヴァルダニアンのあげる論点、星を十字星で描くか丸い点で描くか、ディアデムの結び目が角ばっているか丸いか、貨幣のわずかな重量の違いなど、は、王位の継承順を変更する論拠にはならないと私は思う。^⑦他方、ヴァルダニアン説では、アロット・ド・ラ・フェイ説と同じようにギリシア文字の復活という困難があり、また後述するパレオグセラフィーの点からもウロード一世の貨幣がⅡA期の最後に來るとは考えられない。^⑧これらの点から、ヴァルダニアン説は斥けられるべきであると私は考える。

本稿ではもちろんオジエの提唱した王位の継承順に従うが、オジエの分類にもまだ未確定な点が残されている。フラアート／ウ

ロードIIの貨幣やカブネシキールウロード王タイプ1の無銘貨幣の帰属^④、などがそうである。また、ウロード一世より以前の貨幣には不明な点も多^⑤。

しかし、これらはオジエの説の根幹とは無関係で、以下に述べる鑄造地の推定などにも影響しない。

① Augé, Monnaies d'Élymaide.

② Aliotte de la Fuÿe, Les monnaies de l'Élymaide. Modification au classement proposé en 1907, *Revue numismatique* 1919, pp. 45-84, pl. I-II. 脱稿がオジエの報告刊行以前と考えられる。D. Sellwood, *Minor States in Southern Iran, The Cambridge History of Iran* Vol. 3 *The Seleucid, Parthian and Sassanian Periods*, E. Yarshater ed., Cambridge 1983, part I ch. 8 (b), pp. 299-321, pl. 10-14 にオジエの通説を載せた。またその後、T. S. Kawami, *Monumental Art of the Parthian Period in Iran*, Acta Iranica 26, Leiden 1987 ではオジエの報告が利用されておらず、マロッド・ラ・フエイ説に従った記述がみられる (p. 86)。

③ フラアートをウロード二世の後に置くアロット・ド・ラ・フエイ説とは何の根拠もない。この主張は、一九〇五年の Aliotte de la Fuÿe, *Monnaies de l'Élymaide*, pp. 221-222 に基づいておこなわれる。しかし、この段階ではアロット・ド・ラ・フエイは「ウロード一世やフラアートを前一世紀のアルシヤク朝の王に同定してなり、フラアート貨幣の年代もアルシヤク朝貨幣との比較から出したものである。したがって、II A期貨幣が後一世紀以降に発行されたものである。

ることを明らかにした、一九一九年のアロット・ド・ラ・フエイの研究(注⑥前掲論文)によって、フラアートをウロード二世の後に置く根拠は全くなくなってしまうのである。にもかかわらず、同論文も含めそれ以降、新たな論拠が提示されることもなく、この説は踏襲されてきたのである。小規模有銘貨幣の裏面に描かれる女神が、フラアート貨幣では全身像、ウロード一世、ウロード二世、カブネシキールウロードの貨幣では胸像である、ということ以外、アロット・ド・ラ・フエイ説に有利な点を私は見いだせない。なお、ウロード二世とカブネシキールウロードが別人であるとする説は、オジエの整然としたタイプ分類によって、かなり説得力を増したと思われる。もし仮に、両者が同一人であるとしても、貨幣の発行時期の差、すなわちウロード二世に分類される貨幣の方が先に発行されたこと、に異を唱えることはできないであろう。

④ Alram, *Nomina propria*, pp. 138, 145-151. ただしアルラムは「オジエの分類ではウロード二世タイプ3にあたる貨幣を「カブネシキールウロードの貨幣として分類している。私は、銘文からみてオジエの分類を変える必要はないと考える。しかし他方、オジエがカブネシキールウロードのタイプ1無銘貨幣として分類している貨幣のなかに、ウロード二世タイプ3の無銘貨幣にあたる貨幣もかなり存在する」と考えている。銘文以外では両タイプは区別できないからである。

⑤ Oğuzonlu, Hill, *Catalogue* の Group D と分類されているごく稀な貨幣——後述注⑥参照——の王(□)がはいる。

⑥ P. E. Врѣданин, *Эпиграфические монеты из Хузестана, Находки Ашун и Абури* 1984-I, pp. 93-100.

⑦ その他、ヴァルダニアンは、大規模貨幣の裏面の不規則さ、大規模貨幣

の金属表面上の気泡の有無、肖像の図象学的な関係、をあげ、これらいずれの点でも、カブネシュキールウロードの貨幣の方が、ウロード一世の貨幣より、カブネシュキール(?)の貨幣に近い、としている。なお、最後の点に関しては、しては、ヴァルダニアンは、カブネシュキールウロードの肖像とカブネシュキール(?)の肖像との間に明白な関係がある、と述べているだけで、私にはそう判断する理由が全くわからない。両者の肖像の類似について述べた者はヴァルダニアン以外にはいない。

⑧ 後述、銘文の言語注⑥参照。

⑨ 注④参照。

⑩ カブネシュキール(?)の貨幣は、銘文がないため、はたして一人の王によって発行されたのか、あるいは複数の王によってなのか、そもそも王の貨幣なのかは実はわからない(Le Rider, *Susa*, pp. 426-427)は実に巧みにこの点を避けて記述している)。カブネシュキール(?)の貨幣はI期末のそれとほとんど変わりなく、I期末の貨幣の模鋳が繰り返されただけ、とみる解釈も可能だからである。まして王名については全く不明としなければならぬ。また Hill, *Catalogue* に Group D として分類されている (Alan, *Nomina propria* では NB 3) 無銘の大規格貨幣は、カブネシュキール(?)の貨幣と同時代の発行と考えられるが、知られている枚数があまりにも少なく、バルデ・ネシャーンデヤマスジュデ・ソレイマーンからも出土していないのでここではふれない。ウロード一世より以前の無銘貨幣は、本稿で扱う銘言語とは直接関係しないからである。

三 鑄 造 地

エリュマイス王国II A期貨幣には鑄造地を示すモノグラムは記されていないから、鑄造地の推定は別の方法によらなければならぬ。

ル・リデルは、一九六五年に、エリュマイス貨幣のうち、大規格貨幣はスーサで発見される枚数がぎわめて少ないからスーサ以外

表二 II A期出土地別大規格貨と小規格貨の数量・比率

出 土 地	大規格貨		小規格貨		総 計	
	数量	比率(%)	数量	比率(%)	数量	比率
B N	83	34.1	2354	965.9	2437	1000
M S	16	86.5	169	913.5	185	1000
Susa 1900	4	6.9	577	993.1	581	1000
Susa 1925-1956	6	13.7	431	986.3	437	1000

- ・不明分の貨幣は除いてある。
- ・BN: Bard-e Nešānde (dépôt de fondation)—Augé, *MDAI* 44
- MS: Masjed-e Soleimān—*ibid.*
- Susa 1900—Allotte de la Fuÿe, *MDP* 8
- Susa 1925-1956—*id.*, Susa 1926-1926, Susa 1927-1928, Susa 1929-1930, (*MMAP* 20, 25) および Le Rider, Susa 1946-1956 (*MMAI* 37) の合計。 Allotte de la Fuÿe, Susa 1926-1927, Susa 1931-1932 は、両規格の区別がされておらず、比較不能なので除外。

表三 II A期小規格貨の裏面各形式ごとの出土地別数量と比率

王名・タイプ名 裏面の形式	数 量			比 率 (%)			Susa 1900 形式の比率(%)	
	BN	MS	Susa 1900	BN	MS	Susa 1900	BN	MS
カブネシュキール(?)								
筋・点	50	6	18	21.2	35.5	31.2	26.4	45.5
ウロード一世								
銘文と女神	211	20	102	89.6	118.3	176.8	111.4	151.5
女神(右向)	46	1	0	19.5	5.9	0		
女神(左向)	154	16	0	65.4	94.7	0		
錨	184	10	53	78.2	59.2	91.9	97.1	75.8
バーム・筋・点	119	14	31	50.6	82.8	53.7	62.8	106.1
ウロード一世かフラアート*								
(バーム・筋・点)	28	1		11.9	5.9		14.3	
フラアート								
タイプ1 銘文と女神	149	11	44	63.3	65.1	76.3	78.7	83.3
三日月	12	0	1	5.1	0	1.7	6.3	0
バーム・筋・点	181	14	53	76.9	82.8	91.9	95.6	106.1
タイプ2 銘文と女神	58	3	23	24.6	17.8	39.9	30.6	22.7
ディアデム	23	3	0	9.8	17.8	0		
鷲	8	2	0	3.4	11.8	0		
不詳		1			5.9			
フラアート/ウロードII								
グループ1 鷲	119	9	0	50.6	53.3	0		
グループ2 ディアデム	52	2	0	22.1	11.8	0		
鷲	24	0	0	10.2	0	0		
三日月	33	2	0	14.0	11.8	0		
ウロード二世								
タイプ1 銘文と女神	134	10	30	56.9	59.2	52.0	70.7	75.8
筋・点	251	15	76	106.6	88.8	131.7	132.5	113.6
不詳	3			1.3			1.6**	
タイプ2 銘文と女神	5	0	3	2.1	0	5.2	2.6	0
筋・点	72	4	13	30.6	23.7	22.5	38.0	30.3
ウロード二世タイプ3 +カブ ネシュキールウロードタイプ 1								
wrwd 銘文と女神	46	2	16	19.5	11.8	27.7	24.3	15.2
kwmškyrwrwd 銘文と女神	7	1	4	3.0	5.9	6.9	3.7	7.6
筋・点	299	15	80	127.0	88.8	138.6	157.9	113.6
カブネシュキールウロード								
タイプ2 銘文と女神	21	0	6	8.9	0	10.4	11.1	0
筋・点	65	7	24	27.6	41.4	41.6	34.3	53.0
計	2354	169	577	1000	1000	1000	1000	1000

* うちBN出土の27枚は、ウロード一世かフラアート（タイプ1）の「バーム」あるいは「筋・点」に属するのが確実なので、Susa 1900 にあられる形式に含めて計算した。

** ウロード二世タイプ1の不詳分は、「銘文と女神」か「筋・点」かのどちらかに属すると推定されるので、Susa 1900 にあられる形式に含めて計算した。

で鑄造され、一方、小規格貨はスーサから大量に出土しているからスーサで鑄造された、と推定した^①。この推定をオジエもそのまま踏襲している。

本章では、バルデ・ネシャーンデやマスジュデ・ソレイマーン出土の貨幣も利用し、これらの貨幣をスーサ出土の貨幣と定量的に比較することによって、ル・リデルの推定を、おおすじにおいて確認する。

スーサ鑄造エリュエミス貨幣が出土エリュエミス貨幣総数に占める割合は、出土地別に比較した場合、スーサにおいて最も大きいことが当然予想される。逆に、スーサ以外で鑄造されたエリュエミス貨幣の割合は、スーサにおいて最も小さいであろう。したがって、出土地ごとの割合を比較すれば、鑄造地の推定がある程度可能になるのである。

定量的分析の中心となる史料は、バルデ・ネシャーンデ四柱の神殿の埋納貨幣〔BN〕、マスジュデ・ソレイマーン出土貨幣〔MS〕^②、一九〇〇年発見のスーサ埋納貨幣〔Susa 1900〕^③である。

表二に、出土地別の、大規格貨と小規格貨それぞれの数量および比率を示した。

〔Susa 1900〕やスーサでのその他の発掘時に得られた大規格貨の比率は、〔BN〕〔MS〕の大規格貨の比率の四割以下、一括出

土貨〔Susa 1900〕〔BN〕とそれ以外とでそれぞれ比較すれば五分の一程度である。このことは、スーサが、大規格貨の鑄造地ではないことを示す。ル・リデルの推定の大規格貨に関する部分は裏付けられた。

小規格貨をさらに分析するとル・リデルの予測を超えた結論がえられる。表三は、出土地別にII A期小規格貨の裏面の各形式ごとの数量と比率をまとめたものである。〔BN〕と〔MS〕の比率に大きな差がないことをまず確認しておく。一括出土の貨幣〔BN〕とそうでない貨幣〔MS〕とで同様の比率があらわれることは驚くべきことであるが、ここに大きな比率の差がないから〔Susa 1900〕との比較も可能になる。さて、表三を見てすぐに気づくことは、〔Susa 1900〕にはウロード一世の(銘文のない)「女神(右向)」「女神(左向)」、フラアート(タイプ2)の「ディアデム」^④「鷲」やフラアート/ウロードIIの「ディアデム」の形式が含まれていないことである。当然これらの貨幣はスーサ鑄造ではないことが導きだせる。これはル・リデルの予測しなかったことである。

有銘貨幣を含む残りの小規格貨が、少なくともその大部分はスーサ鑄造であることは、次のような筋道で推論できる。表三の右側の二列の数値は、〔Susa 1900〕にあらわれる形式のみを対象に、

各形式の、対象貨幣の総計に占める比率を出土地別に計算して出した値である ([Susa 1900] については、数値は変わらないので、表三の右から三列目の数値をそのまま見よ)。もしこのなかの貨幣各形式の発行地が異なっていれば、たとえば、有銘貨幣はスーサ製造で無銘貨幣はスーサ以外の製造であるならば、[BN] [MS] と [Susa 1900] の比率には大きな差がみられるにちがいない。ところが三出土地の比率 (表三の右三列) は、全体的にみてかなりよく一致している。このことは、いま扱った貨幣の少なくとも大部分は同一の製造地で発行された貨幣であることを強く示唆する。^⑦ スーサにおけるエリユマイス貨幣の出土数を考えれば、同一の製造地がスーサをさすことはいままでもない。

こうして、II A 期貨幣の製造地は、大規格貨と一部の小規格貨はスーサ以外、有銘貨幣を含むその他の小規格貨はスーサであると結論できる。

なお、スーサで小規格貨が発行されはじめた年代を、ル・リデルは後七五年頃と推定した。多くの研究者がこの年代を採用しているが、ル・リデルの推定の根拠はそれほど強いものではなく、後一世紀後半としておくのがもっとも無難なようである。

以上ここまで、II A 期の王順と有銘貨幣の製造地について確認してきた。つづいて銘文の言語について検討する。

① Le Rider, *Suse*, pp. 426-429. なお彼は、大規格貨の製造地としてフーゼスタン南部のヘディヤーン (Hediyoun, 現 Jarrat) 河畔のセレウケイアという都市を推定している。しかし、この都市名比定に具体的根拠はないので、本稿では単に、スーサ以外、として論を進める。

② [BN] [MS] は、Augé, *Monnaies d'Élymatde* を利用。

③ Allotte de la Fuye, *Monnaies de l'Élymatde* を利用。

④ 前章注④で述べたように、カブネシキールワロードのタイプ 1 無銘貨幣として分類されているものなかにはワロード二世のタイプ 3 無銘貨幣も含まれていると考えられるので、両タイプを同一カテゴリに含めて分類した。

⑤ *xyg* は Augé, *Monnaies d'Élymatde* や Hill, *Catalogue* によれば、「ミアアテム」と「鷲」とでは表面と裏面の刻印のなす角度が異なっている。したがって両形式の貨幣の製造地が異なるのではないかと推定することができる (刻印の角度が製造地と密接な関係にあることについては Le Rider, *Suse*, pp. 20-24 参照)。

⑥ Alam, *Nomina propria*, p. 139 n. 527, p. 146 n. 554. これは、カブネシキール (?) の無銘小規格貨はスーサ製造ではない、としているが根拠は全く示していない。

⑦ 数学的には、複数の製造地で各形式の貨幣がほぼ同じ比率で発行された、という可能性も残っている (たとえば、各形式につき、A 製造地が六割、B 製造地が三割、C 製造地が一割の比率で貨幣を発行する)。しかし、II A 期を通じてこのような金融政策がエリユマイス王国で続けられた、とは考えにくく、また、Augé, *Monnaies d'Élymatde* や Hill, *Catalogue* によれば、ワロード一世の小規格有銘貨幣において

は、表面と裏面の刻印のなす角度がほとんど例外なく一致しており、同一の鑄造地で発行された可能性をより高める（注⑤参照）。仮に鑄造地が複数であっても、その中にスーサが含まれていることに疑いはない。

⑤ Le Rider, *Suse*, p. 427 の推論は以下の通り。最初期の小規格貨の裏面と同様の裏面をもつ大規格貨が一枚、南メソポタミアのテルロール Telloh から一括出土した貨幣の中に含まれていた。一緒に出土した他の王朝の貨幣の年代は、後五三〇四年から後一一一二年の間に分布しているの、中間をとり、後七五年頃を、出土した大規格貨、そして同様の裏面をもつスーサ鑄造の小規格貨が発行され（始め）た年とする。

四 銘文の言語

ウロード一世以下のⅡA期の貨幣の銘文を図二に示した。^①

ただし以下の点について、銘文の読みをまず確定しておく必要がある。

オジエは、カブネシエキールウロードの大規格貨のうち、いくつかが *knškyr wrwd mlk bry wrwd mlk* と読んでくる (Augé, *Monnaies d'Eljymade*, Nos. 2046-2061. 一方, Nos. 2370, 2371 は正しく読んでくる)。しかし、この読みは、アルラムによって指摘されたように、^② *bry* を *br* に修正しなければならぬ。オジエのあげた Nos. 2046-2061 のうち Nos. 2046-2054,

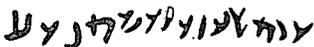
2058, 2059 は *br* (*ry*) の部分は縁にかかっている読みことができぬ。また、同一の刻印で打刻された Nos. 2055-2057 は明らかに *br* であって *bry* ではない。No. 2060 が同様。No. 2061 は写真では読みづらいが *br* の *r* と次の *wd* の *wd* との間に三字入る余地はまずない。よってオジエの読みは全く根拠を失う。疑問の余地なく *br* であることを示す貨幣は、他に、Le Rider, *Suse*, pl. LXXIII, 8 & *Ahram, Nomina propria*, Tf. 16, 480 (図二⑧) などがある。カブネシールウロード大規格貨銘文に対するオジエの読みは、こうして却下される。

さて、銘文の読みが確定したところで、図二を見てみると、ⅡA期貨幣の銘文の文字は三種類(①②③④⑤⑥⑦)あることがわかる。三種類の文字は、それぞれ異なった言語に対応している。

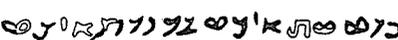
ウロード一世とフラアートの小規格貨に記されるギリシア文字(図二①②)については大きな問題はない。字体が *cursive script* であること、主格形(通常のギリシア語貨幣は属格形を用いる)の語尾のシグマがしばしば脱落すること、誤字や左右逆転した逆字がかなりみられること、などの特徴はあるが、ギリシア語の銘文が記されていることに変わりはない。

残りの二種類の文字は、アラム文字であるが、字体および「キ」

小規格貨

- ① 
- ② 
- ③ 
- ④ 

大規格貨

- ⑤ 
- ⑥ 
- ⑦ 
- ⑧ 

- | | |
|---------------------------------|-------------------------|
| ① 'Υρόδη[ς] Βασιλεύς | ウロード王（一世） |
| ② Βασιλεύς—Πραάπης | フラアート王（Φραάπης と書く例もあり） |
| ③ wrwd MLK' BRΥ wrwd | ウロードの子ウロード王（二世） |
| ④ kwmškyrwrwd MLK' | カブネシュキールウロード王 |
| （あるいは knmškyr- と読むべきか） | |
| ⑤ wrwd mlk' | ウロード王（一世） |
| ⑥ pr't mlk' br wrwd mlk' | ウロード王の子フラアート王 |
| ⑦ wrwd mlk' | ウロード王（二世） |
| ⑧ kbnškyrwrwd mlk' br wrwd mlk' | ウロード王の子カブネシュキールウロード王 |

（字体の出典）②③以外は，Augé, Monnaies d'Élymaide (*MDAI* 44)

- ① No. 104, pl. 5, ③ No. 1534, pl. 11, ④ No. 2374, pl. 16
- ⑤ No. 70, pl. 5, ⑥ No. 804, pl. 8, ⑦ No. 1920, pl. 13
- ②⑧は，Alram, *Nomina propria* (IPNB 4)
- ② No. 473, Tf. 15, ③ No. 480, Tf. 16.

図二 II A期貨幣の銘文

を Br で表記するか BRY で表記するか (大文字、小文字の別は翻字の際の慣習によるものでアラム文字に区別があるわけではない) の違いがある。

大規格貨のアラム文字銘(図二⑤)~⑧)の字体は、ザグロス山間部のアラム語諸碑文の字体、エリユマイス字体、に一致し、「Xの子Y」を Y Br X と表記する点もアラム語の文法に合致している。したがって、大規格貨の銘文の言語はアラム語である。

なお、ウロード一世とウロード二世以降とは、大規格貨銘文の m の字体に差異がみられる。前者の H 字形の字体はタンゲ・ボタン碑文の字体に、後者の X 字形または十字形の字体はタンゲ・サルヴァーク碑文の字体に、それぞれほぼ一致している^⑤。また m の X 字形の字体は、II B 期(ごく一部の貨幣に銘文がある)の銘文の字体とも一致する^⑥。

問題の残るのは、ウロード二世およびカブネシユキールウロードの小規格貨の銘文(図二②)④)である。字体は、同時代のパルティア語碑文・文書に使われる字体(パルティア文字)やアッシユールなどで使われるアラム文字の字体に近い^⑦。あまり特殊化していない、ハカーマニシユ朝以来の伝統的なアラム文字の字体、ということもできる。一方、表記面では、ウロード二世貨の銘文では「Xの子Y」が Y BRY X の形で表現されている。

これがアラム語としては誤りで、したがってこの文字で表わされる言語がアラム語ではないことは、既に一九五二年にヘニンズによって示された^⑧。BRY はアラム語では「私の子」という意味であり銘文の文脈に合致しないからである。パルティア語では BRY というアラム語の単語を書いて *perh* と訓じて読むが、同様にこの小規格貨の銘文も、何かアラム語以外の言語で訓読されていた、と考えられる。

この言語が何語であるのか、動詞もない貨幣の銘文からは、とても決定できない。しかし、Y BRY X という記法が用いられるのはパルティア語であることから、ヘニンズは次のように注記する。「字体の点からも言語の点からも、これらの銘文の言語がパルティア語である、と述べることに抵触するものは何もない^⑨」。ウロード二世らの小規格有銘貨幣の言語の最有力候補として、パルティア語をあげておくことは自然であろう。もちろん、これはあくまで、相対的な可能性が高い、という意味である。

① なお、カブネシユキールウロード小規格貨銘文中の *kmskyr* (あるいは *kmskyr*) の読み方は全くわからない。Eiam. *kapsukira*, Aram. *kmskyr*, Gk. *Kapsukions* / *Kapsukions* のいずれともよく結びつけることができなからである。私は一応、ギリシア語形を経由した形で *komsaskir* あるいは *kamsaskir* という読みを考えられているが、この変化をパルティア語やその他の言語の既知の音韻変化

スーサではない)の銘文はウロード一世以下エリュマイス字体のアラム語で記される。

小規格貨銘文と大規格貨銘文の言語の相違は、エリュマイス王国内でのスーサのもつ独自性を考慮する必要があることを示している。

小規格貨銘文の言語の交替は、スーサにおけるギリシア文化の衰微を象徴するもの、といえるであろう。

一方、大規格貨銘文の言語がザグロス山間部の諸碑文と同じくアラム語であることは、エリュマイス王国下のフォーゼスタンの文化、たとえば美術、をバアルミユラ、ハトラ、ドゥラ・エウロポスなどメソポタミア以西のアラム語圏の文化と比較する際に、重要な示唆を与えるものとなるであろう。

① 新しい王位の継承順を採用した貨幣学者たちは、銘文の言語に関するヘニングの指摘を十分認識していなかった。たとえば Augé, *Monnaies d'Ellymide* では、アラム文字で表わされる両言語ともアラム語であることになっている。反対に M. Alam, *Nomina propria*, p. 138, id., *Arsacids III. Arsacid Coinage, Ely, Vol. II fasc. 5, 1986*, pp. 536-540 中の p. 540 には、両言語とパルティア語が混ざっている。

② エリュマイスを含むこれらの地域の美術は、しばしば「パルティア」美術と呼ばれる。この呼称に対してはさまざまな反対意見が出されているが、ここでは次の事実を指摘するにとどめる。バアルミユラはアルシャク朝の支配下にはなかったこと、バアルミユラとハトラからはパルティア語の碑文、文書は出土していないこと、の二点である。